薩摩版・日向版『聚分韻略』の加筆訓をめぐって
―かまきりの異称アマキビを中心に―

米谷隆史

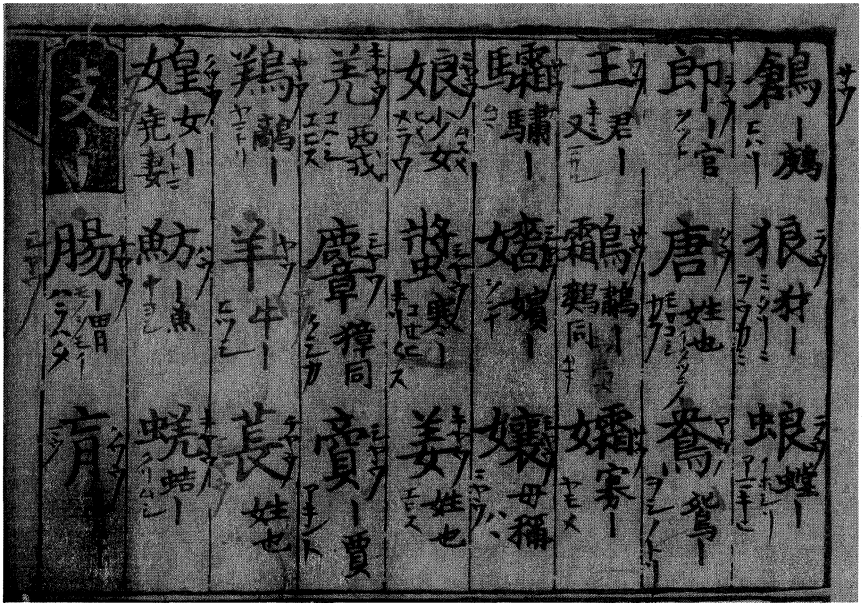
はじめに

虎関師錬の編纂にかかる『聚分韻略』は、当初、平・上・去・入の四声それぞれに順を追っての韻目配列を行う形式であったが、後に、平・上・去を縦に三段に配して韻目配列を行う所謂「三重韻」形式が一般的となる。九州では文明十三年（一四八一）に薩摩版、五十年ほど後の享禄三年（一五三〇）に日向版の三重韻形式の『聚分韻略』が刊行されており、前者は三重韻形式の嚆矢とされている。

『聚分韻略』は室町末期までに畿内や九州・山口・美濃・駿河等各地で刊行されている。印刷物の通例で、書写によってテキストが受け継がれていた段階とは比較にならない数の『聚分韻略』が各々の地で生み出されていったわけである。九州で刊行された二版の『聚分韻略』も、他地域との交流に伴って遠方にもたらされたものがある一方で、刊行地周辺で使用されたものも多くあったと想像される。

室町末期までに刊行された『聚分韻略』は、ほぼ全てが無訓本と見られるが、現存する伝本の多くは使用者によって施された字音・字訓の加筆を有している。『聚分韻略』は主に漢詩文作成を目的として参照される辞書であることから、ここには、当該地域の韻事を巡る場において心得ておくべき知識が記されたはずである。やや抽象的に言えば、各地の使用者がこの辞書を以て参画しようとしていた言語文化が反映していると考えられるのである。

次の画像は、国立国会図書館蔵の薩摩版『聚分韻略』の辞書本文五一丁表の上段部分（平声：陽唐第七の気形門）である。一行目三文字目の「蜋」には「イホシリ／アマキヒ」の加筆が見える。同じ行の「ヒハリ」「ミタリニ」「イホシリ」に見るとおり、この部分には濁点が付されていな



いと考えられることから、「アマキヒ」は、『日葡辞書』がかまきりの異称として見出語とする「アマキビ」であろう。本稿では、このアマキビを端緒として、加筆された語の地域性と、その背景にある言語文化との関係について考察を行うこととする。なお以降、『聚分韻略』への加筆は字音・字訓を問わず「加筆訓」と称するが、本稿では和語のみを調査対象とすることから、字音の加筆訓には言及せずに論を進める。

また、改行は／で示し、割書は〈〉内に、左側の付訓や注は［］内に引用することとした。

一　薩摩版・日向版の伝本と加筆訓

国内での国書の印刷は内典に属するものが主であったが、『聚分韻略』はその成立後早い段階から版本として流布していたと見られており、外典の国書刊行の先駆けともされる。三重韻形式の採用以前にも各地で開版が確認され、室町末期までの版本に限っても現存伝本は多数にのぼる。そのうち、本稿で取り上げる九州の両版について、川瀬一馬（一九七〇）は次のように述べている。

九州の地、南部の島津氏領内に於いては、文明から享禄にかけて数十年間に数種の印行がある。その前半文明年間の薩摩に於ける開版は、桂庵玄樹の教導に負ふもの

である。桂庵玄樹は周防山口に生れ、京に上つて参禅勉学して儒書に通じ、後に入明してかの地に留ること七年、宋学を学んで帰朝した。京都の争乱を岩見に避け、文明八年菊池（重朝）氏に招かれ、次いで十年島津氏の聘によつて鹿児島に赴いた。島津忠昌は桂樹院を建てて師を開山としたが、この地で盛んに宋学を講じ、島津家の家老伊地知重貞と謀り「大学章句」（一冊）を文明十三年（一四八一）に開版した。…中略…

大学章句の初刊と同時に文明十三年に「聚分韻略」（一冊）が開版せられた。…中略…薩摩版聚分韻略の巻末には、文明辛丑刻梓」薩陽和泉荘　の木記がある。その様式は先行の応永十九年刊東福寺版に基くものであらう。後印本にはその木記の下方に「宗藝」の二字を陰刻して入木してある。…中略…

その後稍時を隔てて享禄年間に同じ島津氏の領内日向の地で、聚分韻略と碧巌録とが同時に刊行せられた。

聚分韻略（二冊）は、真幸院の蔵版で、巻末に「享（ママ）禄庚刊刻梓」日陽真幸院」の木記があり、その下方に「作者宥圓」筆者秀篤」と附刻するのは、版本を作る者、刊行者と版下筆者の意であらう。この日向版は明応二年刊周防版に基いてゐると思はれる。…中略…この版木は江戸末期まで摩滅が著しいながらも残存してゐて、屋代弘賢が薩摩藩の知人に依頼しその首尾の部分のみを残版で摺刷してもらつた一本があつた。…以下略（二六一頁～二六三頁）

日向版の版木が残存していたことに関して、川瀬（一九五五）は「屋代弘賢が曽槃に手簡を送り、その残版摺の標本巻首尾三葉を求め得てゐる事実に拠つて判る。その残版摺一冊と曽槃より屋代弘賢に宛てた返簡とが現存してゐる。（家蔵、一冊）日向国は明治維新の際、排仏毀釈が甚しく行はれ、寺院は尽く毀された程であるから、真幸院も今は遺址のみで古版木などの消息も全く不明である」（四九三頁）と記している。川瀬氏の手元にあったこの「残版摺」と「返簡」は現在、宮崎県総合博物館の所蔵となっており、「返簡」に「…日陽真幸／院〈今ハ属／隅州〉般若寺〈浄土／ト覚候〉／〈村上天皇之御宇ニ／創建有之候由〉右之蔵板／御座候…」の記述を確認することができる。なお、かの地における印刷文化発達の背景として、南薩を中心とする文運の高まりに加えて坊津港を介しての堺や大陸との文化的交流の存在を考慮すべきとする島屋政一（一九三三：一三四八頁）川瀬一馬（一九七〇：二六四頁）の指摘にも従うべきであろう。

川瀬氏等の調査を参考にして、原本や紙焼写真、影印

本、電子画像による確認を行った薩摩版・日向版の伝本は次の通りである。

○文明十三年 薩摩版

a天理図書館本　「室町期」

b国会図書館蔵本　「概ね室町期」

c東洋文庫蔵本　「室町末期及び江戸初期」

d国文学研究資料館蔵本

○享禄三年 日向版

e東洋文庫蔵本　「室町末期」

f龍門文庫蔵本　「室町末期頃」と「江戸中期頃」

g京都大学谷村文庫蔵本

h宮崎県総合博物館蔵本

i内閣文庫蔵本（和一九〇八八）

j内閣文庫蔵本（和一九一三一）

k真福寺蔵本

＊薩摩版のうちcは刊記の下に「宗藝」の陰刻を加えた後印本である。また、dは巻末を逸する。

右のほとんどに加筆訓が見られるが、jは加筆訓が冒頭部分に見えるのみであること、kは加筆訓が見られないことから、以降の検討ではこの二本には言及しない。この他、東洋文庫に「覆文明十三年刊薩摩版」とされる無刊記の一本が存するが、刊行地が不明であることと加筆訓が見られないことから、こちらも調査対象としない。

各伝本の所蔵機関が作成した目録が記す書誌情報にはそれぞれに注目すべき点が存するが、伝来に関する点について若干の補足をしておく。東洋文庫日本研究委員会（一九九〇）や島屋政一（一九三三）に言及があるとおり、eには巻末に「奥州和賀郡／薩州下向之砌永伝ニ附与之」「元亀二（一五七一）年初春之上旬　般若寺別当坊恵瑜」の二つの識語があり、前者の識語下部には「永伝」の印文の蔵書印が見える。この識語からは「奥州和賀郡」（現在の岩手県）と「薩州」のいずれからいずれへ「附与」されたのか確定しがたいが、東北地方の僧侶がこの薩摩版を手にすることがあったことは知られる。また、後者について吉松郷土誌編集委員会（一九九五）は、同町（現在は鹿児島県湧水町）「般若寺跡」の「歴代住持と金石文並びに消息」の項で、現存する五輪塔に「恵瑜逆修／元亀三天（ママ）十月」の銘文が見られることを示し、その解説でeの識語との関係に言及している。曽槃の「返簡」に見る「般若寺」は同地であることから、この銘文は日向版の刊行地とその所持者に関する確たる記録ということになる。その他の伝本にも寺院や所持者と見られる蔵書印や識語は見られるものの、特定には至っていない。(注2)

右に示した伝本のうち、a・b・c・e・fの「」内に転載したのは、所蔵機関の目録や影印本の解説が記す加筆時期である。これらは識語などの内容に加えて、片仮名の字体や字形、音訓の語形等を総合的に勘案してなされた判断であろう。その他の伝本については、刷り上がって完成した後、いつ頃加筆訓が施されたのかを判定するのはなかなか困難である。この点に関して、奥村三雄（一九七三：以下奥村氏の言及は全てこの文献による）は、「無訓版諸本に認められる墨筆や朱筆の音訓カナは、その加筆事情など不明のものが多いわけであるが、概ね中世期頃の加筆と見るべきか。第一、カナ付刻本の開版期以降において、わざわざ、無訓本を用い、それに音訓カナを書きこむという様な事は、ちょっと考え難いのである。」（一二八頁）として、「付刻訓」を備える慶長十七年版『聚分韻略』（以下、慶長版と略記する）等が容易に手に入るようになる江戸期に入ってからは、それまでの無訓本にことさら加筆を施す必要性は低くなったとの推測を示された。もちろん、前代の辞書が以降に受け継がれて使用された例はあり、江戸期に入ってからも、書き込みができるいわば白文の『聚分韻略』が学習に際して重宝されたという可能性も排除はできない。しかし、全般的な傾向としては奥村氏の見解は首肯されるところであり、本稿では、時期の推定がなされていない加筆訓についても、概ね江戸期の前半頃までのものと想定することにする。

なお、奥村氏は右の他にも、『聚分韻略』の流布や加筆訓・付刻訓についていくつかの重要な見解を示している。本稿に関わる点を以下にまとめておこう。

イ　加筆訓の存在や慶長版のような「付訓刻本の成立」が「節用的機能の発達を示すものなること」（一二七頁）や「聚分韻略の使用は、中世期において既に、地域的にも位相的にもかなりの広がりを示した」（一二九頁）ことを認めつつも、韻分類であることによる「聚分韻略の庶民的頻用に関する限界」（一三一頁）に注意を促している点。

ロ　慶長版の付刻訓について、「或種の規範性―復古意識とでもいうべきかが著しい様である」、また「《個人的な手控えでなく公刊するもの》という様な意識が、或程度うかがえようか。」（一五三頁）と述べて、加筆訓の側に「個人的な手控え」としての性格を認めている点。

ハ　慶長版の付刻訓にそれ以前の加筆訓とは一致しないものがあることを指摘し、その典拠に「中古～中世期頃の辞書類や、抄物類その他禅宗関係における漢詩漢文の訓ヨミ方なども考え合わされる」（一五五頁）とする点。

ニ　慶長版付刻訓に見られる「ホウ（瞼）」「アヲキ（箑）」

「ヱルリ（爐）」「ヒモロケ（胙）」「マフル（衛・守）」「トラカス（鎔）」「ノヱフス（偃）」のような特殊な音変化形が、bの加筆訓と一致する事を指摘した上で、「もし、これら慶長版付刻訓の出典となった中世地方版の加筆訓が、その出版事情に準じ、各地方人の手になったとすれば、それら特殊形の中には、或程度方言的な要素が含まれているのかもしれない。」（一九二頁～一九三頁）として、加筆訓に地域性が存する可能性に言及している点。[注2]

以降の検討は、右の四点を踏まえて進めることにする。

二　かまきりの異称アマキビ

かまきりを指すアマキビという語に関する先行研究を確認しておく。まずは、辞典類の記述である。

あまきび　直翅目の昆虫カマキリ。「Amaqibi（アマキビ）。「蟷螂（タウラウ）」に同じ。かまきり」（日葡）

『時代別国語大辞典　室町時代編』

あまきび《名》かまきり。＊日葡辞書（1603-04）「Amaqibi（アマキビ）。すなわち、タウラウ〈訳〉かまきり」辞書日葡

『日本国語大辞典第二版』

＊『日本国語大辞典第二版』では他に「甘黍（あまきび）」を、さとうきび（兵庫県及び、岐阜県、愛媛県、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県、以上六県の一部）・さとうもろこし（新潟県、徳島県、香川県、愛媛県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、以上九県の一部）の方言として掲出している。

かまきりの異称は、そのバリエーションの豊富さもあって早くから注目されてきた。柳田国男（一九二七）や東条操（一九三八）、国立国語研究所（一九七二）に加えて、文献を博捜して通史的な観点からの分析を行った下野雅昭（一九八三）、廣戸惇（一九八六）が備わる。これらにおいても、『日葡辞書』以外のアマキビの用例は言及されておらず、近現代の方言分布も確認できないようである。こうした状況もあってか、下野氏は『日葡辞書』掲載のアマキビを「中央語を記述したものではないと考えられる」とされた。また、廣戸氏は、ａａｉｉという母音配列の一致を考慮した上か、アマキビをカマキリ同様に「かま系」の語と位置づけておられる（二九〇頁）。

まず、右の両氏の調査を参考にして、『日葡辞書』中のかまきりを指す語を確認しよう。次に示すように「アマキビ」「カマキリ」「イボジリ」「イボムシ」「タウラウ」の五

語が見られる。

『邦訳日葡辞書』のかまきり

Amaqibi アマキビ（あまきび）Tǒrǒ（蟷螂）に同じ．かまきり…以下略

Camaqiri カマキリ（蟷螂・螳蜋）かまきり．…以下略

Ibojiri イボジリ（螳蜋）かまきり…以下略

Ibomuxi イボムシ（疣虫）あるちいさな虫（補遺に所収。森田氏により「かまきりの異名」と補注）

Tǒrǒ タウラウ（蟷螂・螳蜋）または Camaqiri.（かまきり）かまきり…以下略

＊異称に関わる部分を摘記して引用した。
＊邦訳の「かまきり」に相当する原文は「*Bicho da saude*」。森田氏は Camaqiri の項の注で「この語は諸辞書に見えないが ,Amaqibi；Tǒrǒ の条にも見える．‘乾杯の虫’の意から‘かまきり’を指したのであろうか．」とする。

これら五語のうち「アマキビ」以外の四語は、同時代の古辞書を一覧すれば、いずれもごく容易に掲出例が得られるものである。

螳蜋（カマキリ）［タウラウ］〈異名 巨斧 斧虫 搏輪 転輪 圻父 天馬 拒斧〉（カ気形）　『文明本節用集』

蟷蜋（イモジリ）（イ気形）　螳蜋（カマキリ）（カ気形）　螳蜋（タウラウ）（タ気形）　『易林本節用集』

蟷螂（タウラウ）［イホムシ］（漢文注全て省略　気形）　『下学集』（前田家蔵古本）

四〇〇年以上前のかまきりの異称のバリエーションが各地域でどれほどあったのかを推測するのは困難であるが、古辞書一般に見える四語とアマキビのみであったとは考えにくい。『日葡辞書』に採られなかった多くの異称とアマキビとは何が異なっていたのであろうか。

既に知られる通り、『日葡辞書』には「X（Ximo）」（シモ）の注記によって九州方言であることが示される語がある。したがって、下野氏の推測通り「中央語を記述したものではない」場合は、この注記が付された上で掲出されているのが望ましいことになる。ただし、この注記を詳細に分析した森田武（一九九三）は方言と規範的な日本語の峻別が全編を通して整えられるには至らなかったことを述べている（三〇四頁）し、柴田武（一九六七）は、『日葡辞書』内の「下」注記がない語を対象に、現在主に九州に分布する方言語彙でかつ、「近世及び近世を中心にした時代の中央語文献には見当たらない」三七語を「隠れた近世九州方言」の候補として示した。また、迫野虔徳（一九九八）も、『日葡辞書』に見られる、タマガル（びっくりする）、ソラゴト（うそ）、コーネ（たてがみ）は「九州のかなり特徴的な方言語彙」であるにもかかわらずシモ注記がないことを指摘している[注3]（三三〇頁）。以上のことから、シモ注記が無いことを以て九州方言ではないと確定することは

できないのである。

もちろん、近現代の方言分布が確認されず、他の異称や漢語の異名等との明確な関係を認めることが難しいアマキビの場合、『日葡辞書』以外の用例を見出しがたいというだけでは、地域性を云々するには不十分である。中央語でないと考えるとすれば、用例が見られる文献の成立地の分布を以てその根拠とすることはできないだろうか。bの加筆訓にアマキビが見えることは冒頭に示した通りだが、用例が見られる他の文献についても確認をしてみることにしよう。

三『日葡辞書』以外のアマキビ

三―一 薩摩版・日向版『聚分韻略』

先に述べたとおり『聚分韻略』の加筆訓はその施された時代が明らかではない。しかし、両版の刊行時期は一六世紀前半までであり、刊行後間もない頃の加筆であればこれらが最も早い例となる可能性があるため、最初に示すこととした。

次の表は、薩摩版・日向版の両版のうち、当該部分に加筆訓が存するa～iの九本の『聚分韻略』の「蜋」及びその前後四文字の合計九文字の項に見られる加筆訓を対照したものである。九本の加筆訓に見えるかまきりの異称は、アマキビ（ミ）[注4]、イボ（モ）ジリ、イモムシ、カマキリの四種、これに『聚分韻略』の本文（割書）に存する「螳―」[脱]（タウラウ）を加えると、『日葡辞書』に見えるかまきりの五つの異称が網羅される。[注5]そしてこの九本に限っていえば、本文に存するタウラウを除くと、b・c・d・e・h・iの六本に見えるアマキビが最も一般的な加筆訓なのである。

ここに示したのは両版の加筆訓だけであるが、現在まで確認し得た慶長頃までの『聚分韻略』刊本[注6]には、他にアマキビの加筆訓や付刻訓を見出していない。両版のみに、しかも、もっとも一般的な加筆訓としてアマキビが見えることをどのように解釈すべきであろうか。加筆訓は、各伝本の使用者が思い思いに折にふれて必要な音訓を加筆していったという場合もあろうが、冒頭のbの画像の三行目「鸂」に、すぐ下の「孀」に記されるべきであった「ヤマメ」と、次行の「驦」に記されるべきであった「ムマ」の加筆訓の抹消痕があったり、表のgにおいて「皇」に記されるべき加筆訓が全て一字上の「蝗」に記されていたりするように、目移りによる転写ミスを窺わせる例が見られることから、別の『聚分韻略』の加筆訓を取捨選択しつつ転記するという作業によってなされる場合も多かったと考えられる。古辞書一般にいえる踏襲性の高さは、加筆訓にお

	薩摩版				日向版				
	a	b	c	d	e	f	g	h	i
蝗〈―虫〉		ムシ イナコ	イナコ ヲヽネスミ	イナコ ヲヽネスミ	ヲヽネスミ イナゴ	イナコ	ヲヽイナリ キミ タヽス スヘラキ	イナゴ	イナコ
皇〈君也〉	ヲヽヒ也	ツカサトル タツトシ ヲヽイナリ ヲウキミ	ヲヽイナリ	ヲウキミ ヲヽイナリ	ミカド ヲヽイ也 ヲヽキミ	ヲヽキミ		ヲヽカミ ヲヽイ也	ヲヽキミ
鶬〈―鶊〉	ヒカリ（ママ）	ヒハリ	ヒハリ	ヒハリ	ヒバリ	ヒハリ	ヒハリ ウクイス	ウグイス	ヒハリ
狼〈犬―〉	ミタリニ ヲヽカミ	ミタリニ ヲウカミ	ヲヽカミ	ヲウカミ ミタリ	ミダリニ ヲヽカミ	ヲヽカメ	ミタリニ ヲウカメ	ヲヽガミ	ヲヽカミ ミタリニ
蜋〈螳―〉		イホシリ アマキヒ	アマキミ	アマキヒ	アマキミ		イモシリ カマキリ	アマキビ イモムシ	アマキヒ
郎〈―官〉		ヲツト	ヲトコ				ヲノコ	ヲトコ	
唐〈姓也〉	カラ	イタツラ モロコシ カラ	ヲヽユミ	カラ			モロコシ	イタヅラ	モロコシ カラ
鴦〈鴛―〉		ヲシノトリ	ヲシ	ヲシトリ	ヲシトリ	ヲシ	ヲシ	ヲシ	ヲシトリ
王〈君―／又〉		キミ マサル	キミ	キミ	キミ		キミ	キミ	キミ

いても同様に認められると考えるべきであろう。「蜋」を含めた九文字に対する加筆訓をみると、bやgに他の伝本に見えない語が散見されるものの、相互に多くの共通性を看取することができることから、ある一本に記されたアマキビの加筆訓が、転載を重ねてこの六本に跡をとどめているという可能性を完全に否定することはできないのであ

る。しかし、六本に見えるアマキビが、仮にある一本に源を発するものであったとしても、加筆訓を施す者に「蜋」の訓として適当でないという意識があれば、九本中六本もの伝本に受け継がれることはなかったであろう。薩摩版・日向版を手にして加筆を行うような人々にとって、「アマキビ」は漢詩文作成のための辞書に加筆する語として抵抗のないものだったということになる。

三―二『色葉字集』（仮題）天文二三（一五五四）年写
『色葉集』（仮題）元和六年（一六二〇）年写

いずれも、漢字表記される語をイロハ分類で掲出する所謂「色葉集」の一本である。『色葉字集』は東京大学文学部国語研究室蔵。冒頭のイ～カ部まで部分的に欠丁や破損がある。奥書には「大和国山辺郡桃尾山龍福寺於安楽院之内写之畢／天文廿参年〈甲／刁〉五月六日　海円良寛廿八才」とある。ここに見える「桃尾山龍福寺」は奈良県天理市に位置する古刹である。廃仏毀釈や火災等のため、中世の遺物はほとんど残っていないとのこと[注7]で、「海円良寛」の出自は不明であるが、一六世紀中葉に畿内で書写された辞書であることは間違いない。一方、『色葉集』は慶応義塾図書館蔵。奥書に「高知尾庄／所持安田与左衛門[花押]／元和六庚申歳八月十五日書之／墨付六十八枚」とある。「高知尾庄」は宮崎県の高千穂地域のことである。「安田与左衛門」の伝は未詳であるが、同書の一丁裏に記された江戸期の識語「西元之丞／日向国新小路本主也　光高／主」「日向国新小路住人／西喜内本也」に見える「西元之丞」と「西喜内」は、いずれも高千穂地域の郷士層から延岡藩士となった西氏の後裔で、特に「西喜内」は延岡の「新小路」に居住していたことが確認できる人物であることから[注8]、この辞書が江戸初期に高千穂で書写され、同地から延岡に伝来したものであることがわかる。

両書は類似の辞書本文を有しており[注9]、いずれにもアマキビが見える。掲出する他の異称とともに示そう。

蟷蜋（タウラク）（夕部）　蟷蜋（アマキミ）（ア部）　『色葉字集』
蟷螂（タウラウ）［アマキヒ也］（夕部）　『色葉集』

『色葉集』では夕部の「蟷螂」の注文として見えるのみで、ア部では見出語とはなっていない。なお、『色葉字集』は巻頭に脱落があるため、イモジリやカマキリの掲出の有無は不明である。

三―三『いろは字』永禄二年（一五五九）写

「色葉集」の一本である。妙本寺（千葉県）蔵。鈴木博（一九七四）に影印と索引・解題が存する。編者の日我は

宮崎県延岡出身の学僧である。写年は自筆本奥書末に「永禄二年己未十二月十日〈作者筆者／積年五十二〉日我花押」とあることによる。解題では、「ツクシ辞」と注記して掲出する語が日我の出自である日向の方言である可能性が強いこと、音変化例の中に方言の反映が疑われるものが存することが指摘されている。本書はヤ部以下の下巻が残るのみで、上巻部分における各語の有無は不明と言わざるをえないが、ア部に次の語が見える。

蟷蛝（アマヒキ）［タウラウ］（ア部）

語形は「アマヒキ」である。母音を同じくする二音の交替なので誤写の可能性もあるが、記されたとおりの「アマヒキ」であるとしてもアマキビと同じ系列の語と見られる。「アマヒキ」であれば雨乞いの意に、「アマビキ」であれば雨蛙の異称に通ずることとなるが、今その点について踏み込むことはしない。

三―四『継忘集』元和三（一六一七）年以前写

漢字表記される語を意義分類で掲出する所謂「和名集」の一本である。西崎亨・萩原義雄（二〇〇八）に影印と解題がある。刈谷市中央図書館村上文庫蔵。解題が言及する通り、巻末に筆を異にする次の二つの識語がある。

慶安元年（一六四八）正月廿一日木下氏□（拾カ）遺重春花押／金蔵院座主快全法印弟子快意法印受之

元和三年〈丁／巳〉神無月六日或老人持参求置也／金蔵院当座主快全花押

また、識語の丁の裏には「□（堯カ）祐花押」の記名が見える。識語より元和三年以前の書写であることが知られる。また、村上文庫の蔵書印の他に、円形の蔵印「幡」が見られるが、これは、国文学研究資料館の蔵書印データベースによると『尾張名所図会』等の編者野口道直のものである。識語に見える「金蔵院」はいずれの地域とも知られず、現在のところ特定しうる材料を持たない。ただし、本書中に「白死（シラクサ）」（病之部）や「鰕（エビカニ）」（魚之部）のように、『日葡辞書』においてシモ注記を伴って掲出される語が見えることをたよりに九州地域で該当しそうな寺院の記録を探したところ、鹿児島県旧金峰町（次の坊津町共々現在は南さつま市）田布施の「金蔵院」に識語の一部と符合する点が存することを見出した。同所を末寺とする旧坊津町「一乗院」に、慶安元年の識語を記した人物と同名の「快意」という住職が存在した旨の報告が存するのである。坊津町郷土史編纂委員会（一九六九）の「一乗院関係住職一覧表」は「墓石その他より作成」されたものであるが、そ

こに見える「第一六代快意 明暦年代（一六五五～五八）」という記載である。同様の調査を全国にわたって行ったわけではないのであくまで一候補という域をでないのであるが、後考のためここに記しておく。

『継忘集』における掲出例は次の通りである。

蟷蜋（アマキヒ）［タウラウ］（虫之部）

本書は意義分類体の辞書であり、かまきりを示す語の掲出はこの語のみである。

三―五『肥後国之内熊本領産物帳』：付『産物註書』

享保二〇年（一七三三）写

熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵。盛永俊太郎・安田健（一九八九）に影印と翻刻、解説が収録されている。幕府の医師であった丹羽正伯から各藩に編集と提出が依頼された『産物帳』の控えである。写年は奥書に「享保二十年十一月」とあることによる。また、『産物註書』は国立国会図書館蔵。同じく影印と翻刻が右の集成に収録されている。解説によると「熊本大学図書館で同館に寄託されている永青文庫のやはり「産物註書」と題された文書がこの文書（米谷注：国会図書館蔵『産物註書』のこと）とほぼ同じ内容のものであることを確認することができた。この註書は、前掲、「豊後国之内熊本領産物帳」と「肥後国之内熊本領産物帳」の註書で、永青文庫本の表紙裏の貼紙によると、この註書は絵書と共に一七三七年八月十五日、江戸留守居沢村孫太夫から丹羽正伯の許へ納められたとある」とのことで、『肥後国之内熊本領産物帳』完成後しばらくしてから作成された注解書にあたるものである。なお、「絵書」は伝わっていない。両書の記述は次のとおりである。

蟷螂（カマキリ）　／中略／　あまきびむし　（虫類）

『肥後国之内熊本領産物帳』

あまきび　春の頃生、五歩程ヨリ四五寸程も有之／秋の頃迄居申候　（虫類）　『産物註書』

後者の季節や大きさに関する解説から、「あまきび（むし）」はかまきりの異称と考えられる。なお、全ての国の産物帳が残るわけではないのでその意味を大きくみるわけにはいかないが、盛永俊太郎・安田健（一九九五）によると、同集成に収録された産物帳のうち、この語が見えるのは肥後のみである。

三―六 まとめ

以上、管見に及んだアマキビ及びその系列と見られる

語の用例を示した。右のうち、『聚分韻略』六本、『色葉集』、『肥後国之内熊本領産物帳』、『産物註書』は九州で刊行・書写、乃至は成立したことが確実なもの、また、「アマヒキ」を掲出する『いろは字』の編者も九州出身者であった。他方、九州内に該当しうる寺院が存するものの所持者の特定には至っていない『継忘集』、現在の奈良県で写されたことが確実な『色葉字集』にも掲載が確認された。特に後者は、書写者「海円」が九州出身者であったか、同書の親本が九州地方の語彙を多く収める辞書であって「海円」は付訓の取捨選択をあまりせずに転写を行ったというようなことでなければ、[注10] アマキビが畿内でも理解や使用がなされたことを証する例ということになる。

例えば、キノコ類を示す方言「ナバ」は、『日本国語大辞典 第二版』が集成している近現代の方言分布において、奈良県（松茸の意）を含む、西日本各地に存在が確認されるものの、『名語記』では「鎮西」の語とされ、『日葡辞書』ではシモ注記が付されている。また三―二で言及した『色葉集』に「箱茸（ハツタケ）［ナハ也］」等と見えるものの、文献上の用例もそれほど多くはない。近現代の方言分布に存在が確認されないという点で「ナバ」とは異なるが、江戸時代初め頃まではアマキビも（畿内の中心部では標準的でなかったにしても）西国を中心に異称として用いる地域があったということになろうか。

おわりに

かまきりの異称アマキビの用例を探したところ、九州にゆかりのある辞書類に少なからぬ数が見られた他、畿内で書写された辞書にも一例見られることが明らかとなった。この語の地域上の分布については前節の終わりに記した程度のごく緩やかな限定を加えることしかできなかったわけであるが、薩摩版・日向版『聚分韻略』においては「蜋」に対する最も一般的な加筆訓であることと、用例の下限が肥後の『産物註書』であることをめぐって、今少し補足をしておくこととしよう。

繰り返しになるが、薩摩版・日向版を手にして加筆を行うような人々にとって、アマキビは漢詩文作成のための辞書に加筆する語として抵抗のないものであった。仮に九州以外の地域でもアマキビが用いられていたとしても、この点においては、両版の流布の中心であったと見られる九州の地域性を認めてよかろう。この地域性は、同時代の土着の方言に由来するものであるかもしれないし、ある学統が用いていた注釈的な言語に由来するものであるかもしれない。いずれにしても、『日葡辞書』に掲載されていることと江戸中期の肥後の産物帳に見えることは偶然ではなく、

九州においては江戸初期頃まで、ある程度あらたまった場でも使いうる語であったことの証左と解釈したい。

両版の加筆訓に、畿内においては標準的でない語が記されたのは、『聚分韻略』が漢詩文の作成や理解を主要な目的として参照される辞書であることにその一因があろう。漢詩文は表面的には漢文として漢文脈の中で理解されるわけであるから、例えば漢語「螳蜋」や漢字「蜋」の訓読がカマキリかアマキビかイボジリかは、それらが同じものを指している限りはさして重要でない場合がありうる。学統によるよみくせや地域での異称等、あくまでも紙上に記すことが許容できる範囲内であるにしても、加筆する者が理解しやすい語を書き込む余地はあるものと予想される。想像をたくましくすれば、参照される場の近さや注釈の言語としての共通性から、これらの加筆は奥村氏の述べられるとおり抄物に近いところがあるが、[注11] 講述を前提としない点で、抄物よりも使用者の裁量が多く反映され得るといえようか。版本とはいえ、誰でもが容易に手にして使用することができる書物でなかったことはもちろんのことである。それでも、各地との交流が進み学問上の機運が高まった地域において、私用の辞書を手にする人々が著しく増加したことは、後代に残るような文献には記され難かった語が書き留められる一つの契機となったのであろう。

両版の加筆訓には、『日葡辞書』でシモ注記を伴って掲出される「ナガシ」（梅雨の意）がａ・ｂ・ｅの「霖」の項に、カミの語形「イギ」と対置させられて間接的にシモの語と解される「イゲ」（棘の意）がｂ・ｄ・ｅの「薊」の項にそれぞれ見られる。[注12] いずれも九州地方を中心とする近現代の分布が確認できる語であることから、加筆訓の地域性を示すだけであればこれらを提示することが先であったかもしれない。本稿で文献にのみ存在が確認できるアマキビを取り上げて迂遠な道筋をたどったのは、両版の『聚分韻略』を含め、室町末から江戸初期の九州の辞書群が記録する日本語が、時に畿内を中心とする文献に見えるそれとは異なった姿を見せる興味深い事例と考えたことによる。畿内は別格としても、九州で書写・刊行されたと見られる古辞書の伝本は少なくない。近年は堀畑正臣（二〇一三）のように古記録に見える室町期九州方言の調査も進められている。キリシタンの手になる文献も含め、書かれたものに反映した地域性の諸相はさらに検討すべき余地があるものと考えている。そしてその検討は、辞書をめぐる地域の言語文化を明らかにすることにもつながるであろう。

注

（1）例えばaに記される「龍岡茂兵衛」からは、島津家重臣の龍岡氏との関係が想起されるが、なお検討を要する。天理図書館（一九九八）参照。

（2）ただし、奥村氏の言及は、慶長版の付刻訓が如何に付されたかという事情の究明の必要性を述べる流れの中でのものであったためか、bの加筆訓と慶長版の付刻訓との比較（一四〇頁～一五八頁）の中では具体的な地域と関連づけた「方言的な要素」の指摘はしておられない。なお、本稿で扱う問題からはやや離れるが、鈴木功眞（二〇一三）が明らかにした『倭玉篇』の一類と『聚分韻略』との関係を考える上でも、この点の究明は重要な課題である。

（3）さらに丸田博之（一九九六）は、『日葡辞書』編纂者を「それは「「下の語」に相当精通している」、言い換えれば「九州出身の」、「日本人」（イルマンあたりとするのが妥当であろう）」と踏み込んだ想定をされた上で、『長崎歳時記』等との比較から、近世の九州方言がシモ注記を施されないで見出語となっている例を示している。丸田氏の言及はさらに、『日葡辞書』編纂者が参照した書物に関する分析に及んでおり、本稿のまとめに関わって参考とすべき点が多い。

（4）c・eの加筆訓は「アマキミ。」であるが、加筆訓に「イホ。シリ」と「イモシリ」の両形が見られるように、マ行とバ行の交替は中世においては比較的よく見られることから、これもアマキビにあたるものと見てよかろう。

（5）加筆訓にカマキリが見えるのはgだけでなので単なる偶然かもしれないが、加筆訓にアマキビとカマキリの両方が見える本はない。

（6）薩摩版・日向版以外に、慶長年間までに刊行されたと見られる『聚分韻略』でこれまでに確認したのは、国会図書館・天理図書館・東洋文庫・龍門文庫・内閣文庫・広島大学・山口県立図書館に収蔵のものである。その他の機関が収蔵するものや写本は未確認のものが多い。

（7）龍福寺の沿革等については、桃尾山大親寺の方々より御教示を得た。

（8）西氏の高千穂での出自については、安在かずお（二〇〇五）を参照した。また、「元之丞」「喜内」両名の延岡での身分等については、『牧野家家中分限帳』（年次未詳、『宮崎県史』史料編近世1に所収）や笠間稲荷神社蔵『牧野家中延岡城下屋敷付絵図』等にて確認できる。なお、前者については、高千穂町歴史民俗資料館学芸員の緒方俊輔氏より、後者二点については、延岡市内藤記念館学芸員の増田豪氏より御教示を得た。

（9）両書については高橋久子（二〇〇六）に言及が備わる。また、『色葉集』に見える九州方言の反映と見られる例の詳細については別の機会に述べることとする。

（10）もちろん、これらはあり得ない想定ではない。奥村氏が指摘するbの加筆訓と慶長版の付刻訓との類似などとも併せて考えるべき問題であろう。また、柳田征司（一九九八：七六二頁）における檻の意の「ヲロ」という語に対する検討も参考になる。

(11) 柳田征司（一九九八：五八九頁）の「抄物と辞書とは元来極めて近いところに位置するものであった」とする指摘、及び『韻府群玉』の抄物として『玉塵』が存在することや、住吉朋彦（二〇〇九）が言及する『古今韻会挙要』古活字本への書入や同整版本付訓に見られる「ソ」式訓点の存在を念頭に置いている。

(12) 注(6)の範囲内では、他にこの二語が見られる『聚分韻略』はない。ただし、『日本国語大辞典 第二版』が集成している近現代の方言分布においては、いずれの語もナバと同様、九州にその存在が限定されるわけではない。

参考文献

安在かずお（二〇〇五）「西臼杵の姓氏43―①西氏」（『かるめご』二〇〇五―三、JA高千穂地区）

磯野直秀（二〇〇三）「『日葡辞書』の動物名」（『慶応義塾大学日吉紀要・自然科学』三四）

奥村三雄（一九七三）『聚分韻略の研究 古本四種影印／慶長版総索引』（風間書房）

川瀬一馬（一九五五）『古辞書の研究』（講談社）。ただし、引用は（一九八六）『増訂 古辞書の研究』（雄松堂出版）に拠った。

川瀬一馬（一九七〇）『五山版の研究』（The ABAJ）

川瀬一馬（一九八二）『龍門文庫善本書目』（阪本龍門文庫）

岸本恵実（二〇一二）「キリシタン版羅葡日辞書の方言語彙」（『和漢語文研究』一〇）

九州方言研究会（一九六九）『九州方言の基礎的研究』（風間書房）

国立国語研究所編（一九七二）『日本言語地図』第五集第二二九図、第二三〇図（大蔵省印刷局）

小林隆（二〇〇四）『方言学的日本語史の方法』（ひつじ書房）

迫野虔徳（一九九八）『文献方言史研究』（清文堂）

佐藤貴裕（一九八六）「東西方言対立語からみた『書言字考節用集』の性格」（『国語学』一四九）

柴田武（一九六七）「『日葡辞書』の九州方言」（『本邦辞書史論叢』、三省堂）

島屋政一（一九三三）『印刷文明史 第二巻』（印刷文明史刊行会）

下野雅昭（一九八三）「かまきり（蟷螂）／いぼじり（疣じり）／とうろう（蟷螂）」（『講座日本語の語彙 第9巻 語誌Ⅰ あいさつ～ぐそく』、明治書院）

鈴木功眞（二〇一三）「倭玉篇類字韻永禄六年写本の構成ならびに詩作との関連性に就いて」（『訓点語と訓点資料』一三〇）

鈴木博（一九七四）『妙本寺蔵永禄二年 いろは字 影印・解説・索引』（清文堂）

住吉朋彦（二〇〇九）「古活字本『古今韻会挙要』考」（『斯道文庫論集』四四、住吉（二〇一二）に補訂再録）

住吉朋彦（二〇一二）『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』（汲古書院）

高橋久子（二〇〇六）「色葉字の性格に就いて」（『訓点語と訓点資料』一一六）

天理図書館（一九九八）『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』（天理大学出版部）

東条操（一九三八）「関東に於ける蟷螂の土語」（『国語と国文学』十二月号）
東洋文庫日本研究委員会（一九九〇）『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅰ』（財団法人 東洋文庫）
西崎亨・萩原義雄（二〇〇八）『刈谷市立図書館蔵村上文庫本「字書」四種―本文編―影印・解題』（関西文化研究叢書 別巻、武庫川女子大学関西文化研究センター）
廣戸惇（一九八六）『方言語彙の研究』（風間書房）
福島邦道（一九八八）『語史と方言』（笠間書院）
坊津町郷土史編纂委員会（一九六九）『坊津町郷土史 上巻』（坊津町郷土史編纂委員会）
堀畑正臣（二〇一三）「中世阿蘇文書に見える記録語をめぐって」（『阿蘇カルデラの地域社会と宗教』、清文堂）
丸田博之（一九九六）「日葡辞書の編者とその周辺」（『国語国文』六五―五）
三澤成博（二〇〇〇）「主要伝本和訓対照一覧」（『永正元年版 聚分韻略』付載、港の人）
森田武（一九九三）『日葡辞書提要』（清文堂）
盛永俊太郎・安田健（一九八九）『享保／元文 諸国産物帳集成 第Ⅹ Ⅲ巻』（科学書院）
盛永俊太郎・安田健（一九九五）『享保元文諸国産物帳集成 補遺編Ⅲ』（科学書院）
安田章（一九八三）『中世辞書論考』（清文堂）
柳田国男（一九二七）「蟷螂考」（『土のいろ』四・四、『定本柳田国男集』（筑摩書房）による）
柳田征司（一九九八）『室町時代語資料としての抄物の研究』（武蔵野書院）
吉松郷土誌編集委員会（一九九五）『吉松郷土史（改訂版）』（吉松町）
米谷隆史（二〇一〇）「資料紹介 諫早文庫所蔵の古本節用集について」（『国語語彙史の研究』二九、和泉書院）
李承英・湯沢質幸（二〇〇七）「日本の韻書と韓国の韻書―聚分韻略と三韻通考―」（『日本学報』七一、韓国日本学会）

本稿は、第六三回西日本国語国文学会及び二〇一三年度日本語学会秋季大会での研究発表をもとに作成したものである。発表に対して意見を頂戴した方々に御礼を申し上げます。また、貴重な資料の調査を許してくださった各収蔵機関と貴重な情報を与えてくださった関係者の方々にも厚く感謝申し上げます。

＊本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「古辞書における方言掲載意識に関する研究」（代表者 米谷隆史：課題番号23520562）及び、同「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」（代表者 岡島昭浩：研究課題番号25370517）の成果の一部である。

【初校に際して】
『衆星堂古書目録 乙未仲呂』（平成二十七年四月二十日発行）に、薩摩版（「宗藝」の陰刻を加えた後印本）が掲載されている。朱墨の加筆訓も存するようである。